

令和 3 年 4 月 24 日現在

機関番号：15401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2020

課題番号：18K02758

研究課題名(和文)多様性に富む共生社会構築に向けた小学校用「多様性把握シート」の作成と活用

研究課題名(英文)Creation and utilization of "diversity grasp sheet" for elementary schools to build a symbiotic society rich in diversity

研究代表者

若松 昭彦(Wakamatsu, Akihiko)

広島大学・人間社会科学研究科(教)・教授

研究者番号：70230919

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は「多様性に富む共生社会」の実現を目指し、多様性に富む児童らが学ぶ主体として、自分たちの力でよりよい学級・学校生活を創り上げていくという普遍的な資質・能力の向上を願って、小学校教員7名、大学教員1名、大学院生1名で研究チームを組織した。第1軸では、児童の多様性を横断的・縦断的に質的に価値づける先行研究の知見や課題を整理し、各学校で多様性に富む児童の姿で語る研究を進め、査読誌に研究成果が5本採択された。第2軸では、第1軸を踏まえて、多様性に富む児童らが学級生活を創り上げていく姿を具現化した絵本を開発し、教育委員会を含む教職員156名、特別支援学級を含む児童995名を対象に有用性を検証した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

第1軸では、「多様性に富む共生社会」の実現を目指して、協同問題解決や持続的で主観的な幸福の要素であるエンゲージメント理論、教室談話研究の振り子型モデル、向社会的判断の発達理論および向社会的動機の多元性理論、メタ認知的活動に基づく共有過程研究等の概念的・理論的枠組みを用いて、児童の多様性を質的に価値づけるための言動データの収集・分析を行った。第2軸では、第1軸の研究成果を基にシナリオ素案を作成し、2名の絵本作家を交えて、意思決定や合意形成、多様な児童が自身のよさや可能性を生かして活躍する場面等を含めた絵本を開発した。報告会や新聞報道で多くの反響が得られたことから、絵本は出版を目指すこととなった。

研究成果の概要(英文)：In this research, we aimed to realize a "diversified symbiotic society." And I hoped that the children would create a better class and school life with their own strength. We organized a project team with 7 elementary school teachers, 1 university teacher, and 1 graduate student. In the first axis, practical research was carried out at each school, and five research results were published in peer-reviewed journals. In the second axis, based on the first axis, we developed a picture book that embodies the appearance of children creating a class life. Then, the usefulness of picture books was verified for 156 faculty members including the Board of Education and 995 children including special needs classes.

研究分野：特別支援教育学

キーワード：小学校 多様性に富む共生社会 協同問題解決 エンゲージメント 教室談話 向社会性 メタ認知的活動 絵本開発

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

申請者は、文部科学省の委託事業の一環として、「発達障害のある児童生徒が在籍する学級の集団づくり」研修会(2015年9月19日)を主催した。この研修会は、広島県内小学校の校長や教員を含めた約30名で実行委員会を組織して企画・運営にあたり、研修会当日は約270名の参加者とともに学びを深めた。このことが契機となり、研修会後も広島県内外の小中学校と連携を図りながら、「多様性に富む共生社会の実現」に向けた共同研究を進めていた(若松・水野・陰, 2016; 若松・川原・熊田・鏡原, 2017; 若松・部谷岡・原岡・品川・高橋, 2017)。共同研究で重視したことは、子どもたちの『声』の多様性を尊重すること、学校現場に対して『二人称的アプローチ(対象を情動的存在, かかわる人のかかわりに応える存在, 応答的関係を求めている存在とみなすアプローチ)を行うこと。データや観察資料は『協働的産物』とすることである(秋田・能智, 2007; 無藤, 2013; 佐伯, 2017)。共同研究を通して、「多様性に富む共生社会の実現」のためには、児童の多様性を横断的・縦断的に価値づけ、質的に見える化する研究を進めていくことが重要であると考え、本研究課題の構想に至った。

2. 研究の目的

研究開始当初の本研究の目的は、全校的な協力体制が得られる中国地方の小学校に研究協力を依頼し、「多様性把握シート」作成を通して、児童の多様性を横断的・縦断的に価値づけ、質的に見える化することで、「多様性に富む共生社会」の実現に寄与する知見を得ることであった。その目的達成のために小学校教諭7名、大学教員1名、大学院生1名の9名でプロジェクトチームを組織し、3年間で約40回の協議を行った。前述の秋田・能智(2007)や無藤(2013)、佐伯(2017)を重視しながら初年度第1回プロジェクト会議(2018年8月11日)を実施した結果、当初の構想を学校現場のニーズに沿って発展させたものとして、下記の2軸を目的に設定することとなった。第1軸の目的は、児童の多様性を横断的・縦断的に質的に価値づける先行研究(Batson, 2011; Berkowitz, Oser, & Althof, 1987; 鹿毛, 2018; 西村・村上・櫻井, 2015; Seligman, 2011; Skinner, 2016; 山口, 2007)等の知見や課題を整理し、小学校で実践研究を進め、査読誌に研究成果を発表することとした。第2軸の目的は、第1軸の研究成果やプロジェクトチームの専門性を結集させるという観点、「多様性に富む共生社会」の実現に寄与する資質・能力を育成するために必要な教育活動を活性化させるという観点、「多様性把握シート」の構想を発展させるという観点から、低学年や特別支援学級の子どもにも読み聞かせができ、教材としての実用性・汎用性が高いという利点がある絵本(視覚的教材)を開発することとした。

3. 研究の方法

(1) 第1軸では、「多様性に富む共生社会」の実現を目指して、協同問題解決(鈴木・邑本, 2009; 植田・岡田, 2000)や持続的で主観的な幸福の要素であるエンゲージメント理論(鹿毛, 2013, 2018; Seligman, 2011; Skinner, 2016)、教室談話研究の振り子型モデル(Berkowitz, Oser & Althof, 1987; 高垣・中島, 2004)、向社会的判断の発達理論(Eisenberg-Berg, 1979; 菊地, 1983)および向社会的動機の多元性理論(Batson, 2011 菊池・二宮 2012)、メタ認知的活動に基づく共有過程研究(山口, 2007)等の概念的・理論的枠組みを用いて、児童の多様性を質的に価値づけるための言動データの収集・分析を行った。

(2) 第2軸では、プロジェクトチームで協議を重ねて一冊の絵本試案を開発した。絵本試案の開発に当たっては、2名の絵本作家に協力を依頼し、学級経営の専門家から指導・助言を受けた。また、その専門家からの助言を受けて、教育委員会や管理職を含む小学校の教職員と、特別支援学級を含む小学3年生から6年生の児童を対象に、絵本試案に対する質問紙調査を実施した。

4. 研究成果

(1) 小学校2年生を対象として、よりよい集団生活を実現するための課題に着目し、その課題を学級全体で共有し解決に向けて吟味するという協同問題解決を進めていくための手段として、特別活動の話合い活動に着目し、「授業成立のための文脈に沿った機能的な言動」である規範および、「他者の利益を意図し、援助や協力、共有などを示す言動」である向社会性との関連を検討した。従って、本研究を通して、協同問題解決に向けて、児童の多様性を質的に価値づけるための分析的枠組みを生成することができた。具体的には、規範に関する発話は、浅い交流的意見と深い交流的意見、浅い交流的質問・提案、深い交流的質問・提案、交流的応答に分類された。また、向社会性に関する発話は、具体的な他者(例:同じ学級や他学年の児童名)や学級全体(例:学級のみんな)が発話中に含まれている場合にカウントし、向社会的発話を援助的発話と協力的発話、共有的発話に分類した。発話カテゴリー分析の結果から、議題を意識した理由付きの発話の定着や共通の目標を達成しようとする協力的な発話が見られた。また、肯定的な感情を共有し、集団のよさを実感していることがうかがわれる発言や、多角的観点から自分の考えに関する理由を述べる発言が出現するようになった。これらの結果と関連して、研究終了時の学級満足度尺度の結果は、満足群の児童が81.8%となり、親和的な状態の学級集団になった。

【関連文献】松本浩司・若松美沙・若松昭彦(2019). 小学2年生における協同問題解決のプロセスと規範および向社会性の促進との関連 学級経営心理学研究, 8, 81-92.

(1) 学級活動における児童の役割と、探究的な学びの姿につながる概念であるエンゲージメントとの関連について、事例を用いて検討した。小学校 2 年生 2 名と 6 年生 2 名の計 4 名の児童を対象に、話し合い活動およびその後の実践で構成される学級活動での言動をエンゲージメントの 3 側面（行動的側面、感情的側面、認知的側面）から分析した。従って、本研究を通して、エンゲージメントを発現するという観点から、児童の多様性を質的に価値づけるための分析的枠組みを生成することができた。具体的には、行動的側面が「困難なことへの尽力（苦手なことに力を尽くしたことを自己評価している）」「役割への専念（役割を自覚して、専念している）」「熱心な発言・実践（自ら進んで何度も繰り返している）」「話し合いへの参加（非言語的な反応や動作を交えて参加している）」の 4 つ、感情的側面が「自分の意見や活動への誇り（自己の言動や活動に誇りを感じながら自己評価している）」「自分や他者の興味・楽しさ（自他の興味や楽しさを表明している）」の 2 つ、認知的側面が「方略の吟味・提案（よりよい意見となる方法を吟味・提案している）」「目的の自覚（話し合いや実践の目的を自覚している）」「目標達成のための努力（話し合いや実践の目標を達成しようとしている）」「他者・全体への配慮（他者や全体に注意して、気を配っている）」「他者・全体の感情の推論（他者や全体の感情を推し測っている）」の 5 つに分類された。分析した結果、2 年生の事例からは、話し合い活動において黒板記録や司会といった司会グループとしての役割を経験することで、行動的側面および認知的側面のエンゲージメントが発現することが示された。また、6 年生の事例からは、話し合い活動やその後の実践での役割を経験することで、1 年生に対する役割への専念、学校行事に対する目的の自覚といった行動的側面のエンゲージメントや、よりよい意見を考えることを意識した認知的側面のエンゲージメントが発現することが示された。これらの事例から、学級活動における児童の役割とエンゲージメントの発現が関連している可能性が示唆された。

【関連文献】陰菜穂子・津中友里菜・若松美沙・若松昭彦（2020）. 学級活動における児童の役割とエンゲージメントの関連 - 小学校低学年と高学年の事例検討を通して - 学級経営心理学研究, 9, 61-73 .

(1) 小学校 2 年生を対象に、話し合い活動での児童の発話に着目して、学級集団への参画に関する解釈的分析を行った。従って、本研究を通して、学級集団への参画を発話機能と発話内容の側面から、児童の多様性を質的に価値づけるための分析的枠組みを生成することができた。具体的には、発話機能が「利己的発話（話し合い活動において、自分自身のために志向する発話）」「利他的発話（話し合い活動において、友達や教師のために志向する発話）」「集団的発話（話し合い活動において、学級集団のために志向する発話）」の 3 つ、発話内容が「単一型（相互に関連しない理由を述べる内容『...がいい。その理由は、～だから。』）」「関連型（自分の意見と他者の意見を関連づけて理由を述べる内容『〇〇さんと似ていて、...がいい。その理由は、～だから。』）」「反証型（自分の意見と他者の意見が異なる理由を述べる内容『〇〇さんの...が心配。その理由は、～だから。』）」「共有型（自己と他者の両方の意見を理解し、意見を述べる内容『...という心配意見は、～をしたらいい / ～だったら納得できる』）」の 4 つに分類された。対象とした 6 回分の話し合い活動について、まず、発話機能を分析した結果、第 1 回から学級の「みんな」の存在を意識した集団的発話が生起し、第 6 回では特定の他者のために考えた利他的発話も多く生起するようになった。次に、発話内容を分析した結果、関連型の発話には、課題を解決するために重要な意見であることを訴える児童の姿が、反証型・共有型の発話には、課題を見出し解決するための案を考えたり、その解決案に納得したりする児童の姿がみとれた。話し合い活動での発話を解釈的に分析することで、学級集団に参画しようとする具体的な児童の姿の明示につながり、教室での発話分析研究（Mercer, 2010）進展の一助となったことが推察された。

【関連文献】山本耕祐・若松美沙・若松昭彦（2020）. 小学校低学年における学級集団への参画に関する解釈的分析 - 学級活動「話し合い活動」での児童の発話に着目して - 初等教育カリキュラム研究, 8, 61-70 .

(1) 異学年交流活動を計画・運営する小学校 4 年生から 6 年生までの児童を対象に、異学年交流活動に向けた話し合い活動とその実践に着目して、各学年の向社会的判断の特徴を検討した。向社会的判断の発達レベルを用いて、各学年の話し合い活動での発話の解釈的分析、および話し合い活動とその実践のワークシートの記述分析を行った。従って、本研究を通して、向社会的判断の特徴という観点から、児童の多様性を質的に価値づけるための分析的枠組みを生成することができた。具体的には、発話内容・記述内容を「自己焦点的志向『自分が興味ある / 楽しかった / 嬉しかった / 満足した』」「次は...したい」「他者の要求に目を向けた志向『友達が楽しめる / 楽しめた』」「友達に喜んでもらいたい」「承認および対人的、あるいは紋切り型の志向『話し合っ解決することはいいこと』」「みんなが納得できてよかった」「みんなとめあてを達成できてよかった」「友達と仲が深められる」「自己反省的な共感的志向『友達が楽しそう』」「〇年生にとって」「遊び方を教える」「達成感を味わえる」「移行段階『少数意見を尊重したい』」「リーダーとして責任を果たす」「社会で役立てたい」「強く内在化された段階『みんなの立場は一緒に平等であ

る』『違うクラスもみんな仲間である』『自分や仲間にとって価値ある経験である』『過ごしやすい学校生活をつくる』の6つに分類した。分析した結果、本研究で対象とした4年生では、利己的な判断とともに紋切り型の利他的判断が多くみられたが、5年生では、他者の尊厳を守る必要性を考慮に入れた判断が一定の割合で認められた。さらに、6年生では、異学年交流の中核を担うなかで、より高次の判断である利他的判断を内在化する段階に移行しつつある児童もみられた。向社会的判断という認知的枠組みを用いて、異学年交流活動における各学年の特徴を明らかにした点に、本研究の意義があると考えられる。

【関連文献】橋本久美・若松美沙・若松昭彦(2021). 異学年交流活動における上学年児童の向社会的判断の特徴に関する研究 学級経営心理学研究, 10, 53-63.

(1) 小学校6年生を対象に、「話し合い活動」での児童の言動を発話内容と記述内容の視点から分析することを通じて、合意形成過程の実態を明らかにした。従って、本研究を通して、多様な価値・観点をもつ集団での話し合いが重視され、課題解決に至るプロセスを示す合意形成という観点から、児童の多様性を質的に価値づけるための分析的枠組みを生成することができた。具体的には、発話内容が「単一型(相互に関連しない自分の意見や理由を述べる内容『...がいい。その理由は、~だから。』)」「関連型(自分の意見と他者の意見を関連づけて理由を述べる内容『〇〇さんと似ていて、...がいい。その理由は、~だから。』)」「反証型(自分の意見と、他者または前述した自分の意見が異なる理由を述べる内容『〇〇さんの...が心配。その理由は、~だから。』)」「共有型(自己と他者の両方の意見を理解し、新たな提案を述べる内容『...という心配意見は、~をしたらいい。~だったら納得できる。』『...は心配。だから~をしたらいい。』『...という意見は、~と工夫すれば~よりいい。』)」の4つ、記述内容が「モニター(他者が示す行動や判断を評価する内容『〇〇さんの...という行動が~だった。』)」「照合:肯定的評価(自分の行動や判断に対して、肯定的評価をする内容『話し合い活動で私は~ができた。』)」「照合:肯定的でない評価(自分の行動や判断に対して、肯定的でない評価をする内容『話し合い活動で私は~ができなかった。』)」「調整:実践(話し合い活動後の実践場面で、自己の行動や判断の在り方を調整しようとする内容『実際に...をするときは、~ができるようにしたい。』)」「調整:次回(話し合い活動(次回)の話し合い活動場面で、自己の行動や判断の在り方を調整しようとする内容『次の話し合い活動では、~ができるようにしたい。』)」の5つに分類された。まず、発話内容の結果から、各月で特徴は異なるものの、「話し合い活動」に参加した児童の半数以上が、「話し合い活動」とその後の実践を継続的に経験することで、他者との相互作用のある対話である反証型および共有型の発話を重ねて合意形成に至ったことが明らかになった。次に、記述内容の結果から、「話し合い活動」後に振り返りを提出した児童の大半が、「話し合い活動」とその後の実践を継続的に経験することで、メタ認知的活動(モニター・照合・調整)に基づく共有過程を辿ったことが明らかになった。

【関連文献】野地香苗・西村由惟・新宅祐子・若松美沙・若松昭彦(2021). 小学校高学年における「話し合い活動」での合意形成過程の実態 - 児童の発話内容・記述内容の分析を通して - 初等教育カリキュラム研究, 9, 35-44.

(2) 絵本試案開発の過程

プロジェクトチームの先生方の実践経験を結集し、第1軸の研究成果を基に、シナリオ素案を作成し、2名の絵本作家を交えて推敲を重ねた。絵本は、特別支援教育や特別活動で重視されている意思決定や合意形成などを含む場面や、多様な児童が自身のよさや可能性を生かして活動する場面等を含めた内容で32頁である(図1表1)。2020年5月には、学級経営の専門家の大学教授に助言をいただき内容的妥当性を高めた。



図1 抜粋ページ

表1 絵本試案の場面

A	児童が着席している場面
B	新学期を迎えた場面
C	学級開きの場面
D	学級生活上に課題を抱える場面
E	前年の学級生活を思い返す場面
F	議題箱に提案カードを入れて学級会が始まる場面
G	学級会柱 すること 出し合う場面
H	学級会柱 すること 比べ合う場面
I	学級会柱 すること まとめると、柱 工夫の場面
J	話し合いの中で、ある児童が心配意見を発表する場面
K	心配事を解決する方法を提案する場面
L	提案が繰り返されて、学級会が終了する場面
M	決めたことを実践する日に向けて休憩時間に練習する場面
N	決めたことを実践する場面
O	実践の中で、練習の成果を発揮する場面
P	心配意見を発表した児童が活躍する場面
Q	実践が終了する場面
R	学級生活上の課題が解決に向かう場面

(2) 開発された絵本試案に関する効果測定

2020年8月から10月にかけて、教職員(156名)、特別支援学級を含む児童(995名)*を対象に、試案段階の絵本に対する質問紙を実施し、有用性の検証を行った。教職員の内訳は、教育委員会6名、管理職9名、学年担任125名(1学年18名、2学年18名、3学年16名、4学年17名、5学年17名、6学年22名、特別支援学級15名、通級2名)、主幹2名、研究主任1名、専科9名、養護教諭2名、その他2名である。フェイスシートで勤務年数、特別活動に関する研修会等参加回数の記載を求めた。結果から、開発された絵本は、児童が合意形成過程や協力の意味の理解につながるのではないかと教師が感じていることや、特に3・4年生にとって有用であるが、他の学年にとっても一定の有用性があると教師が感じていること、現実や実際の状況とは異なるが、多くの教師が今後の実践への活用を検討し、教師の指導・助言を学ぶツールとして有用であると感じていることが示された。これらは、勤務年数や研修等への参加回数による差は認められなかったため、開発された絵本が、若手や中堅、ベテランに至る全ての教員にとって有用であるとともに、教員の特別活動への関心の高低に関わらず有用であると言えるであろう。前述したの合意形成過程に関する自由記述式回答欄(以降、回答欄)には、「特にHの話合いのめあてに沿って、理由を述べながら意見を言うことが大切だと理解できた。(1年担任)」や「合意形成の過程が児童目線で詳しく描かれているので分かりやすい。他の絵本では、ここまで児童の意見を描いていないのでイメージしやすい。色々な意見が出された中で、少しずつテーマに向かって焦点化していく過程がよく分かる。(3年担任)」、「Hは子どもたちが自主的に話合い、他者のために工夫している。(3年担任)」、「HIが子どもの日常によくあり、身近で主人公に自分を投影しやすい。(特別支援学級担任)」等の記述があった。以上の結果から、絵本には、話合い活動の出し合う、比べ合う、まとめるの場面が具体的かつリアルに設定され、例えば、多様な立場を考えながら折り合いをつけたり、心配意見を発表する児童の視点を受け止めたりする等、児童の意見や気持ちが明確に記載されていることから、合意形成過程を理解することにつながるのではないかと教師が感じていることが示唆された。また、協力の意味の理解に関する回答欄には、「Lでは相手のことを考えた行動が描かれており、Oの言葉がけから相手への気持ちが伝わる。(管理職)」や「自分たちの経験と重なる。(1年担任)」、「OPQで具体的な姿が示され、Rで目指すクラス像が伝わる。(6年担任)」、「協力の意味の本質が理解できる。協力するための具体的な行動のあり方が理解できる。(教育委員会)」等の記述があった。以上の結果から、絵本には、児童の経験と重なる話合い活動の工夫、すなわち、心配意見やその心配事を解決する提案の場面が設定され、工夫を通して学級全員が楽しめたり、他者や学級のことを考えた意見を出したり、練習場面で手を差し伸べたりする等、児童の意見や気持ちが明確に記載されていることから、協力の意味理解につながると教師が感じていることが示唆された。の有用性に関する回答欄には、1・2年生は内容面、3・4年生は分量面・具体性・内容面・経験面、5・6年生は分量面・教師の指導助言面・具体性・内容面で有用という記述があった。の今後の実践への活用に関する回答欄には、「教師主導よりも児童同士が話し合っただけの方が責任をもって意欲的に取り組める。(1年担任)」や「現段階で学級活動を実践できていないから活用できる。(3年担任)」、「学級や学校を高めるのは自分たちだという当事者としての思いを子どもにもたせたい。(主幹)」、「日々業務に追われる今日、学級・学校という集団社会で何が大切か、何を学ばせるか、我々教師の考え方・教育観につながる。(特別支援学級担任)」、「自分たちで考えて実践することはうまくいくか否かに関わらず、それ自体が子供たちにとって成長につながる。(養護教諭)」、「学校は価値観の異なる人が学ぶところ。学級会の活用で集団の力を向上させることにつながる。(管理職)」等の記述があった。また、教師の指導・助言理解に関する回答欄には、「はじめて学級会をする初任者の研修会で効果的だ。(4年担任)」や「私たち若手教員にとっても参考になる。(4年担任)」、「絵本を読み実践を重ねることで、教師が何を大切に考えて指導していくか、ぶれない軸が必要だ。(1年担任)」、「子どもの力を信じて、このような話合いができるクラスにしたい。(1年担任)」、「話合い活動の中で、子どもたちの表情を見て、困っている子どもに配慮した姿があった。教師は子ども同士の関わりを信じて見守る姿勢が大事だ。(その他)」等の記述があった。

【関連文献】若松昭彦・川原陽子・陰菜穂子・山本耕祐・橋本久美・廣田誠・松本浩司・横山謙治・岸本勝義・若松美沙(2021).学級活動の良さや進め方を伝える絵本開発(1)-学ぶ環境を創造する教師を対象とした質問紙調査- 学校教育実践学研究, 27, 153-160.

*投稿予定文献:若松昭彦・松本浩司・橋本久美・廣田誠・陰菜穂子・山本耕祐・川原陽子・横山謙治・岸本勝義・若松美沙(掲載年).学級活動の良さや進め方を伝える絵本開発(2)-学ぶ主体である児童を対象とした質問紙調査-

(2) 開発された絵本試案に関する報告会・報道

2020年8月に全国の先生方や大学生等約240名に対して中間報告会、2021年2月に国語科教育専門の大学教授や教育委員会の先生に講演を依頼し、絵本の価値づけを目的に最終報告会を開催した。中国新聞社(2021年3月1日掲載)、地方紙(2021年3月2日掲載)で報道された。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 6件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 陰菜穂子・津中友里菜・若松美沙・若松昭彦	4. 巻 9
2. 論文標題 学級活動における児童の役割とエンゲージメントの関連 - 小学校低学年と高学年の事例検討を通して -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 学級経営心理学研究	6. 最初と最後の頁 61-73
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山本耕祐・若松美沙・若松昭彦	4. 巻 8
2. 論文標題 小学校低学年における学級集団への参画に関する解釈的分析 - 学級活動「話し合い活動」での児童の発言に着目して -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 初等教育カリキュラム研究	6. 最初と最後の頁 61-70
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15027/48911	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 松本浩司・若松美沙・若松昭彦	4. 巻 8
2. 論文標題 小学2年生における協同問題解決のプロセスと規範および向社会性の促進との関連	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 学級経営心理学研究	6. 最初と最後の頁 81-92
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 若松美沙・若松昭彦	4. 巻 7
2. 論文標題 小中学校での社会的発達に関する研究：児童生徒への質問紙調査と教員によるエピソード記録を通して	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 初等教育カリキュラム研究	6. 最初と最後の頁 85-95
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 野地香苗・西村由惟・新宅祐子・若松美沙・若松昭彦	4. 巻 9
2. 論文標題 小学校高学年における「話し合い活動」での合意形成過程の実態 - 児童の発言内容・記述内容の分析を通して -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 初等教育カリキュラム研究	6. 最初と最後の頁 35-44
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 橋本久美・若松美沙・若松昭彦	4. 巻 10
2. 論文標題 異学年交流活動における上学年児童の向社会的判断の特徴に関する研究	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 学級経営心理学研究	6. 最初と最後の頁 53-63
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 若松昭彦・川原陽子・陰菜穂子・山本耕祐・橋本久美・廣田誠・松本浩司・横山謙治・岸本勝義・若松美沙	4. 巻 27
2. 論文標題 学級活動の良さや進め方を伝える絵本開発 (1) - 学ぶ環境を創造する教師を対象とした質問紙調査 -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 学校教育実践学研究	6. 最初と最後の頁 153-160
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 山本耕祐・若松昭彦・若松美沙
2. 発表標題 小学校特別支援学級における学級集団への参画に関する解釈的分析 - 「話し合い活動」での児童の言動に着目して -
3. 学会等名 日本特別活動学会第29回岡山大会 自由研究発表
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------